

末黒野

すぐろの

11月号 (通巻807号)



妻
逝
く

小川玉泉

送り火の果てて安堵の妻の笑み
妻ははや言葉失ひつくつくし
氷水ごくりと妻ののど通る
みまかりし妻へ届けと法師蟬

秋ともし妻に安心あんじんあらしめよ
後れ毛のひと筋額に秋灯
秋の供花みな美しや妻の笑む
齒を見せて笑む妻無言朝の虫
秋暑しつい母さんと口に出で
ひとときを妻の遺影と虫を聴く
亡き妻の笑顔へ供へ梨葡萄
妻に告ぐけさ酔芙蓉二十輪

葛の花

松本三千夫

経験のなき豪雨てふ残暑かな
芒原切絵のごとき月上げて
鶺鴒の来て艶めける川瀬かな
叢へ残像確と穴惑
一斉に宮鳩発てり蓮は実に
抜け道は朝のみ通り葛の花
湖山の風こきまぜて濃竜胆
放生の池の濁りや竹の春
初秋や波は引くとき音立てて
坂上のここにも空家白木槿
新築の屋根は寄棟泡立草
木の形に草の形に藪枯らし

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

緑 蔭

安斎久英

百合園を巡るカートや風切りて
緑蔭や拳より稚寝落ちたる
ゲレンデを歩き交ふリフト夏木立
左千夫忌やタベ鶯老いを鳴く
蒲の穂や沼の淀みに影揺らす
日の温み残る茅の輪をくぐりけり
信濃より甲斐へ育ちぬ雲の峰
高架橋これより信濃道灼くる
客待ちのパラグライダー晩夏光
花火果つ島漆黒の闇纏ひ

舟 虫

大橋伊佐子

くちなしの香を玄関に客を待つ
紫陽花や今朝から着たるジャワ更紗
溪谷の奇岸巨石やほととぎす
血の気引くごと舟虫の失せにけり
ハンカチーフ失意の胸にたたみけり
サングラス取り核心にふれにけり
魚臭濃き町の迷路や凌霄花
ときめきは捨てずに生きむカンナ燃ゆ
花蓼や音立てて湧く富士の水
送り火の消ゆる無言の別れかな



乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）



青葉風

吉田きみえ

温泉の四方の森より秋の蟬
雷去りて宿の広場の作り滝
早立ちの一学級や朝涼し
高原の雨の俄かや百合明り
白樺や溪の深さの青葉風
空蟬の枝にすがりて暮れ近し
自在鉤峠の茶屋の夏炉焚く

砂紋

森清信子

滴り

石黒興平

ゆるやかな蛇行の川や雲の峰
語り部の正面見据ゑ広島忌
石段に続く石段蟬しぐれ
照りつくる日差に暗し夏木立
胡瓜揉み口の重たきけふの夫
引潮の砂紋の著し今朝の秋
夕風の雲をほぐしぬ涼新た

しらかしの茂りや品濃一里塚
切岸の昏きに点り合歡の花
水打つて風引き寄する湯宿かな
放牧の牛の百態大夏野
羅をまとひて風をまとひをり
時折の涼風恃む写経かな
磐座の滴り神の鼓動とも

百人の僧の勤行朝涼し
珈琲にさとうたつぷり蟬の朝
子の作る団子いびつや蟬時雨
兵歴を記す父の書土用干
石載せて屋根てらてらと竹煮草
小夜ふけて雨となるなり魂祭
夕牡丹句集上粹 黒滝志麻子さんへてふ新涼の句集かな

深閑と寺しんかんと百日紅
つい其処が老いには遠し夏の昼
暑し暑し他に言葉の無きがごと
追憶や手花火の玉落ちてより
生れてはや目高の矢とも光とも
鮮らしき風を吐くやに桔梗咲く
水たつぷり父よ母よと墓洗ふ

己がじし傾ぐ浮標や日の盛り
蓮の葉や銀色の雨止め
池へ引く水路の冥し半夏生草
花合歓に停む乙女エトランゼ
初蟬や遅延バス待つ停留所
神鏡に映る木立や蟬時雨
白水を今朝も手塩のミニトマト

雀らのかげひそめたる大暑かな
鯉はねて万緑の影くづしけり
三色の刺身こんにやく巴里祭
髪洗ひひと日の憂ひ流したり
新盆の久遠の空の深さかな
ひとり焚く炎大きや魂送り
くもりなきワイングラスや星まつり

青炎集

小川玉泉選



横浜 原 和三

横浜 太田 良一

向日葵や雲払ひたる八ヶ岳

夕風や父母亡き里の籐寝椅子

白蓮の暮れ残りをり平家池

夏霧や鬼押出の奇岩群

浅間山の伏流水や滝しぶき

白南風や波のかがよふ城ヶ島

横浜 高橋 明

横浜 斉藤 マキ子

海開き波しかと踏む欄宜の杏

青竹の杓新しき噴井かな

虫干や残る面影ひろげつつ

鮎の瀬に挑む釣師の孤独の背

神興ゆく鱒背男のものならず

草の根の白ゆさゆさと清水かな

炎天の急流下る悲鳴かな

仲見世に水打つ音や女下駄

甚平の僧の撫でをり時の鐘

路地深く風を呼込み古すだれ

船頭の汗を飛ばせり川下り

敗戦忌蛋白質のなき夕餉

横浜

露の葉を一椀代り山の水

衝立の仕切るひと間や泥鰯汁

海暮れて火花火師たび蹴

一匹の蚊を連れ来たる見舞籠

蚊遣火を腰に奉仕の氏子連

図書室にしはぶき一つ天使魚

横浜 辻井ミナミ

片つけて夫大の字や夏座敷

竹林に絡みて烏瓜の花

篁の風清し今年竹

明明と照らし出されし花火舟

腕白に拾はれてをり落し文

灯の涼し波にまかせて屋形船

横浜 小田嶋正敏

百合咲くや愛猫眠る庭の墓

院内は無季の世界や土用入

朝焼や団地の棟を乱反射

凌霄の花に個性の言葉かな

母を追ふ足は小幅の藍浴衣

熱中症聞かぬ日はなし夏深し

横浜 渡辺絹代

青鷺の浅瀬離れず夕日影

回廊の迫り出す緑の蓮見かな

踊る手の馴れて笑顔の山場かな

踊る手の振りのまちまち露店の灯

見ゆるほどに生れて六日の目高かな

整へて松かろがると月涼し

横浜 山中 蕃

鵜篝を川面に映し長良川

迷路めくひまはりの丘子らはしやぐ

滴りの多き崖下苔多し

風鈴の夜の静寂を呼び込めり

星の数声出しかぞへ夕端居

ひとときの豪雨の去りて蟬時雨

横浜 小倉 純

駅毎に増ゆる浴衣着星祭り

爺と孫しのび足なる捕虫網

熊蟬の目覚めうながす湯宿かな

講義果つ笈の小文や雲の峰

雷鳴の雨をこぼさず去りにけり

門涼み近所隣りと雨談議

横浜 滝沢いみ子

空蟬の足に力の残りけり

静けさや池一面の古代蓮

紅蓮の咲いて彩よし蕾よし

百日紅並木の道は海へ抜け

蟬の句の多き句会に和みけり

暮参濟み川に遊べる日の暮るる

耕 土 集

松本三千夫選



渡辺富子

蔓のびて無駄花多き胡瓜かな
卵塔のあまた並ぶや蟬時雨
狢犬の睨みするどき大暑かな
一雨の過ぎたる後や夕端居
風つかみ風放ちたる芭蕉かな

横 浜 長田 厚子

海月浮きちぎれ雲浮く入江かな
雲間より小さき日差し夏の海
七夕や都会の空の星数へ
枳の実の色付き初めぬ雲きらら
立秋や尾瀬の夜空の星月夜

北郷 和顔

新 潟 太田チエ子

携帯を忘れて戻る玉の汗
ベイブリッジ潜る船上波涼し
朝顔の予期せぬ色に咲きにけり
流星を湿原に撒く尾瀬の間
銀漢や熊と同居の山の中

梅干して昼餉の遅き一家かな
夕顔の花の明かりの路地曲る
閑伽桶の水をゆらせる秋の風
粃の形すで見せたる稲穂かな
ぢりぢりと晴れわたる日や稲の花

吉田美智子

横 浜 坂口 郁子

垂直に食道通過生ビール
少年の虫籠囲む園児の目
兄追ひて妹芒に溺れけり
闊歩する孫子初秋のシャンゼリゼ
盃蘭盆や妣と弟来る茶の間

杜ゆする閑の声とも蟬しくれ
袖通すあてなきままに土用十
風に乗る音頭の太鼓夕端居
下駄草履靴も交へて踊りの輪
迎へ火のはや十年の月日かな